

海のいのち

立松 和平 文
伊勢 英子 絵

1 父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが住んでいた海に、太一もまた住んでいた。季節や時間の流れとともに変わる海のどんな表情でも、太一は好きだった。

「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ。」

2 子供のころから、太一はこう言ってはばからなかった。

3 父は、もぐり漁師だった。潮の流れが速くて、だれにももぐれない瀬に、たった一人でもぐっては、岩かげにひそむクエをついてきた。ニメートルもある大物をしとめても、父は自まんすることもなく言うのだった。

「海のめぐみだからなあ。」

4 不漁の日が十日間続いても、父は何も変わらなかった。

5 ある日父は、夕方になっても帰らなかった。空っぽの父の船が瀬で見つかり、仲間の漁師が引き潮を待ってもぐってみると、父はロープを体に巻いたまま、水中で事切れていた。ロープのもう一方の先には、光る緑色の目をしたクエがいたという。

6 父のもりを体につきさした瀬の主は、何人がかりで引こうと全く動かない。まるで岩のような魚だ。結局ロープを切るしか方法はなかったのだった。

クエ
本州中部から南の太平洋岸にいる魚。体長は、一メートルをこえる。



7 中学校を卒業する年の夏、太一は、与吉じいさにでしにしてくれるようたのみに行った。与吉じいさは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師だった。「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなつとる。」

「年を取ったのなら、ぼくをつえの代わりに使ってくれ。」

8 こうして太一は、無理やり与吉じいさのでしになつたのだ。

9 与吉じいさは、瀬に着くや、小イワシをつり針にかけて水に投げる。それから、ゆっくりと糸をたぐっていくと、ぬれた金色の光をはね返して、五十センチもあるタイが上がってきた。バタバタ、バタバタと、タイが暴れて尾で甲板を打つ音が、船全体を共鳴させている。

10 太一は、なかなかつり糸をにぎらせてもらえな



かった。つり針にえさを付け、上がってきた魚からつり針を外す仕事ばかりだ。つりをしながら、与吉じいさは独り言のように語ってくれた。

「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」
11 与吉じいさは、毎日タイを二十びきとると、もう道具をかたづけた。

12 季節によって、タイがイサキになつたりブリになつたりした。



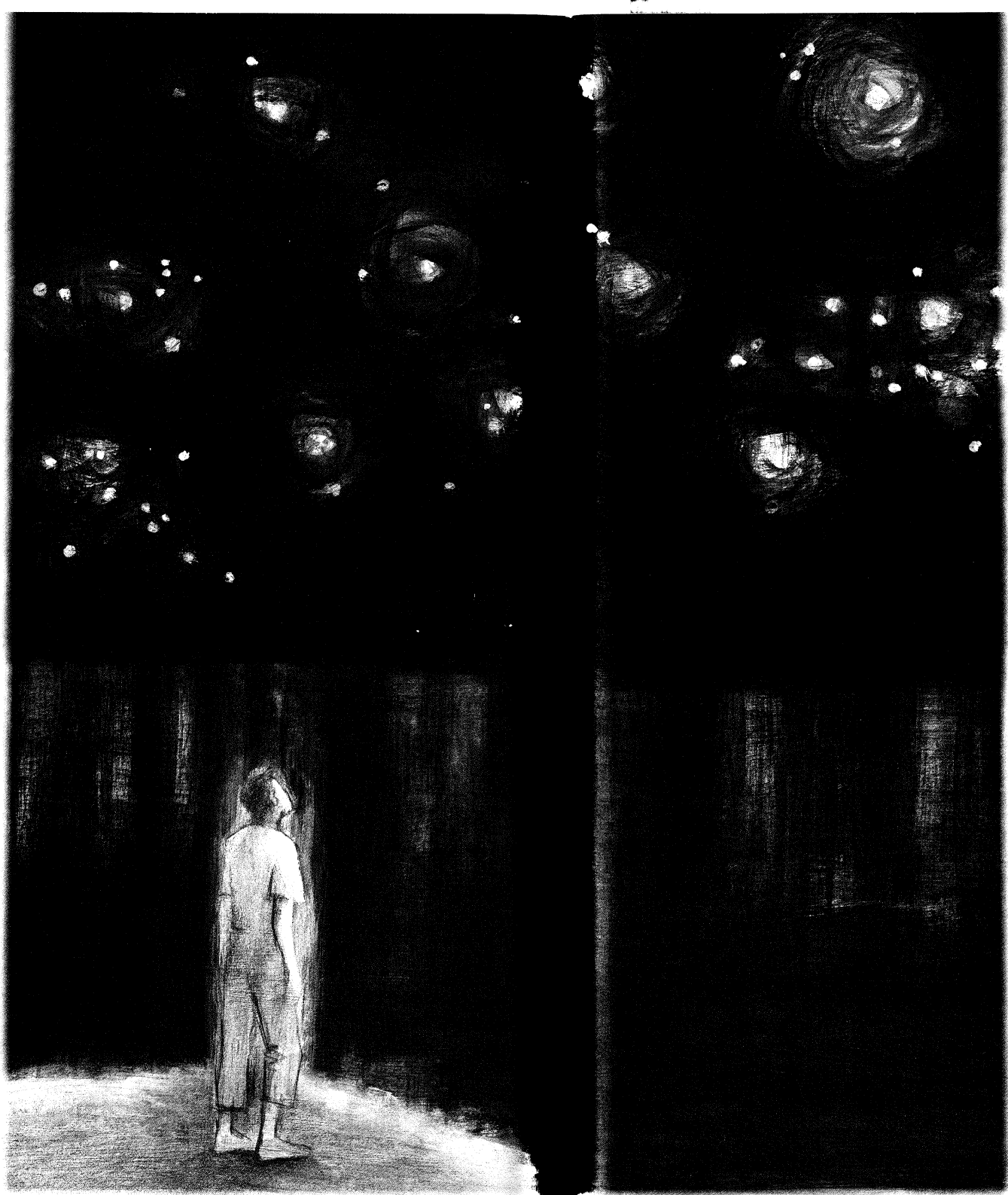
13 でしになって何年もたったある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一に向かって、与吉じいさはふつと声をもらした。そのころには与吉じいさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

14 船に乗らなくなった与吉よきちいさの家に、太一たいちは漁から帰ると毎日魚を届けに行った。真夏のある日、与吉いさは暑いのに毛布をのどまでかけてねむっていた。太一は全てをさとった。

「海に帰りましたか。与吉いさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」

15 悲しみがふき上がってきたが、今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせる事ができた。父がそうであったように、与吉いさも海に帰っていったのだ。



16 ある日、母はこんなふうに言うのだった。

「おまえが、おとうの死んだ瀬せにもぐると、いつ言いたすかと思うと、わたしはおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」

17 太一は、あらしさえもはね返すくっ強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。



18 いつも的一本づりで、二十ぴきのイサキを早々ととった太一は、父が死んだ辺りの瀬に船を進めた。

19 いかりを下ろし、海に飛びこんだ。はだに水の感しよくがこちよい。海中に棒になって差しこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には何も聞こえなかったが、太一はそう大な音楽を聞いているような気分になった。とうとう父の海にやってきたのだ。

20 太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。父を最後に、もぐり漁師がいなくなったので、アウビもサザエもウニもたくさんいた。激しい潮の流れに守られるようにして生きている二十キロぐらいのクエも見かけた。だが太一は興味

を持ってなかった。

21 追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。

22 太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。

23 海底の砂にもりをさして場所を見失わないようにしてから、太一は銀色にゆれる水面にうかんでいった。

息を吸ってもどると、同じ所に同じ青い目がある。ひとみは黒い真珠のようだった。刃物のような歯が並んだ灰色のくちびるは、ふくらんでいて大きい。魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。岩そのものが魚のようだった。全体は見えないのだが、百五十キロは優にこえているだろう。

24 興奮しているながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師



棒
ボウ

激
はげしい
ゲキ

*不意に

穴
あな

宝
ホウ
たから

吸
キョウ
すう

灰
はい

*優に

奮
フン
ふるう

だった父を破った瀬の主なのかもしれない。太一は鼻づらに向かってもりをつき出すのだが、クエは動こうとはしない。そうしたままで時間が過ぎた。太一は、永遠にここにいられるような気さえた。しかし、息が苦しくなって、またうかんでいく。

もう一度もどってきても、瀬の主は全く動こうとはせずに太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にどけ、クエに向かってもう一度えがおを作った。

「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」

こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さなくてすんだのだ。大魚はこの海のものだと思えた。



やがて太一^{たいち}は村のむすめと結こんし、子供を四人育てた。男と女と二人ずつで、みんな元気でやさしい子供たちだった。母は、おだやかで満ち足りた、美しいおばあさんになった。

太一は村一番の漁師であり続けた。千びきに一ぴきしかとらないのだから、海のいのちは全く変わらない。巨大なクエ^{きよだい}を岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、もちろん太一は生がいだれにも話さなかった。

